

研究主題 主体的・対話的で深い学びを確実に実現するための学習指導の在り方
— 評価からの授業改善を通して —

行方市立麻生中学校

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）では、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が示された。その中で、「学習評価の充実」が求められており、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」や、「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら評価の場面や方法を工夫して、学習の過程や成果を評価し、指導の改善や学習意欲の向上を図り、資質・能力の育成に生かすようにすること。」が明記されている。さらに、行方市教育委員会学校教育課から示された「評価からの授業改善」の授業改善の資料（令和3年4月26日）からは、「評価からの授業改善」とは、見取ったことを指導に生かす「授業改善」の視点と、指導したことを目標に照らして見取る「適切な評価力」の2つで成り立つことが示された。これらのことから、評価からの授業改善を通して、主体的・対話的で深い学びを確実に実現することが重要だと考える。

本校の生徒の実態調査から、約9割の生徒は授業に主体的に取り組み、約8割の生徒が「授業がわかる」と回答しているが、授業の内容がわからない生徒への個別の対応及び合理的配慮の方法について課題が見られる。また、今年度より新学習指導要領が全面実施され、資質・能力が三観点に整理されたが、適切な評価の在り方について十分な研究が進んでいるとは言えない。

そのため、本研究では評価からの授業改善を通して、主体的・対話的で深い学びを確実に実現するための学習指導の在り方について究明していく。

2 研究のねらい

各教科の授業において、①導入の「問い」を生徒に届けること、②生徒の思考を「ゆさぶる」関わり方をする、③適切な評価規準を設定することの三点を通して、主体的・対話的で深い学びを確実に実現するための学習指導の在り方を究明する。

3 研究の見通しと内容

(1) 基本的な考え方

① 導入の「問い」を生徒に届けるとは

導入の「問い」とは、授業の導入で設定する本時の学習課題・学習問題のことである。岩田一彦は「課題」と「問題」を区別しており、「課題」を「学習指導要領及び教科書から教師が設計した中核的問い」とし、「問題」を「子どもが各自の興味・関心から発見した中核的問い」としている。中学校の学習指導においては、学習「課題」が設定されることが多いが、

本研究では、導入の場面において効果的な資料の提示や、生徒がもつ既存の概念を崩すことによって、生徒が「これについてもっと調べてみたい」「これは解決しなければならない」と考えるような学習課題を設定する。このような導入の工夫を図ることで、生徒は学習課題について見通しをもって取り組むことができ、主体的・対話的で深い学びの実現につながると考えられる。

② 生徒の思考を「ゆさぶる」関わりとは

本校では、茨城大学の打越正貴教授を招聘し、「ゆさぶり」についての研究を進めてきた。「ゆさぶり」について打越教授は、「ゆさぶりとは、教師と子どもと教材の間における緊張関係を授業の中で実現するために、教師が子どもに対して行う働きかけの一種である。」としている。本研究では、学習課題を設定する場面や、生徒の発言に対しての切り返しの発問など、教師が生徒の思考を「ゆさぶる」関わり方を行うことで、生徒の授業に対する主体性を高めたり、学習内容の理解を深めたりすることができると考えられる。

③ 適切な評価規準を設定すること

これまで述べた「問い」が届くこと、「ゆさぶり」を実現するためには、学習目標を実現するための授業構想が必要である。授業構想をするにあたり、学習指導要領の目標に準じるため、単元を「逆向き設計」で考えることで、単元で育成する資質・能力を整理するようにした。また、行方市学校教育プランに示されている「学習指導案への記載内容」を、指導案の検討会で相互確認するようにした。特に授業の「評価規準」と「評価基準」の関係性を基に、本時のねらいとする「生徒の姿」をどの場面で、どのように見取るかを明確にしてから研究協議を行うことで、教師の評価力の向上を図ることができると考えられる。

(2) 主題に迫るために

① 「評価からの授業改善」を進めるために

評価からの授業改善を図るために、図1のように各教科ごとの「麻生中授業スタイル」を作成し、各教科での授業の進め方の統一を図った。そうすることで、本研修の流れを全教職員で共有できるようにした。

② 授業公開について

本研究の推進のために、本年度も茨城大学の打越教授を3回招聘し、「ゆさぶり」についての共同研究を行った。また、国士舘大学の澤井陽介教授を招聘し、社会科における授業実践を行った。さらに、市教委によるフォローアップ研修や、教員評価のための授業公開を相互参観などを行うことで研究の推進を図った。

授業公開後の研究協議では、本研究のねらいである①導入の「問い」を生徒に届けること、②生徒の思考を「ゆさぶる」関わり方をすること、③

図1 麻生中授業スタイルの例

麻生中学校授業スタイル「理科A」			
生徒に届く「問い」	評価から構想する授業改善	生徒の思考を「ゆさぶる」関わり	
①学習の見直し 1分 プロセス・ゴールイメージ (学習目標・学習内容・学習方法・時間・役割・役割の転換)	④観察・実験をする 15分 結果を処理する 5分	⑤結果を分析して解釈する (1)自力解決 5分 (2)学び合い 10分 ・ペア・グループ・クラス ・学び合いの順序 聞く・つなぐ・もどす 【理科の見方・考え方】 ・比較する ・関連付ける ・条件を制御する ・多面的に考える ・分類する ・順序付ける ・見通す ・具体化する ・構造化する	⑥まとめ 4分 ・学習課題に準拠付ける。 ・その意義をまとめる。 ・「○○の場面は○○だった。」 ・「○○○○の場面は、○○であった。」 ・「○○は、○○に類似している。」
②課題提示 2分 生徒に届く「問い」 課題内容・課題達成の工夫 自ら考えようとする条件を 形成することを要する 富み育つことに時間をもち 思考を促す問題を設定する。 認知性、必要感、矛盾、理解 開かれた問い「何と何の関係か」 「○○は、なぜ起こるのだろうか」 「○○○○の場面は、何だったか」 「○○○○の場面には、どのような関係があるのだろうか」 主体的な学び	③予想する (解決の見直し) 2分 ロゼット紙の活用	⑦練習問題 3分 ・学習課題に準拠付ける。 ・学習を評価する。 ・個別最適な学び ・協同的・探究的な学び	⑧振り返り 3分 サイエンスサステナブル に記入する ・「何が分かったか」 ・「何が分かってなかったか」 ・「疑問点」 ・自分の思考、達成感 自分の思考、達成感を感じ 取らせる

適切な評価規準を設定することについて、協議を行った。特に、評価規準と評価基準の関係性については、抽出生徒の記述や発言等を基に、評価基準に照らし合わせるとどの評価になるかを協議することで、教師の評価力の向上を図った。

(3) 検証の方法

本研究の検証のため、生徒と教員に対するアンケートを実施し、研究実践についてまとめを行った。また、年度末に全教員に成果と課題を挙げ、研究の方向性の評価を行った。

4 研究の成果と課題

(1) 導入の「問い」を生徒に届けることについて

導入の「問い」を届けるために、各教科で様々な導入の工夫が行われた

第2学年英語科の授業では、「日本の食事のマナーを、これまで学習した内容を使って外国の人に説明する。」という学習内容で授業を行った。導入の場面では、授業者の外国の友人に実際に撮影してもらった動画を流し、「日本に初めて行くのだが、日本の食事のマナーを教えてほしい」という場面設定を行った。こうすることで、生徒に「外国の人に日本の食事のマナーを教えるにはどのような表現を使えばよいのだろう。」という課題に対する必要感を高めることができた。

このように、導入の「問い」を届ける工夫を行うことで、生徒が学習課題について見通しをもって主体的に学習に取り組むことができた。

(2) 生徒の思考を「ゆさぶる」関わりについて

第3学年理科の「遺伝」の学習では、これまで学習したメンデルの遺伝の法則が「本当に正しいのか」と導入場面で生徒をゆさぶることで、学習への主体性を高めることができた。これまで学習してきた内容とは違う資料や、それが「本当なのだろうか。」と改めて問いかける概念崩しの手法を用いることで、生徒の思考にゆさぶりをかけ、学習意欲を喚起することができた。

このように、生徒の思考を「ゆさぶる」関わりを取り入れることで、主体的・対話的で深い学びを実現することができた。

(3) 適切な評価規準を設定することについて

評価規準と評価基準との関連性を考え、本時の学習でどのような記述が見られればB評価となるのかを、指導案上に示した。図2のように、本時の評価（図中の※）と評価基準（図中の●）として、評価規準と評価基準の関係性を明確になるようにした。

第2学年社会科の「関東地方」の学習において、学習指導要領から導かれる評価規準を基に、本時での評価基準を設定した。評価基準を明確にすることにより単元を通して「指導に生かす評価」を見取りやすくなり、単元の終末にある「記録に残す評価」を付けるた

図2 評価基準の設定

※	高速道路の開通による行方市への影響について、これまでの学習と交通・通信網の発達の意味を踏まえて、これからの行方市の在り方を主体的に考えようとしている。
●	地域間の結び付きの整備が進んだ行方市において、交通・通信網の発達の意味を踏まえて、「行方市は地価が安いので、広大な土地を使った工場の建設を進めて、工業生産を高める」といったようなこれからの行方市の在り方について具体的な手立てを既習事項を基に考えることができる。

めに、単元の途中で生徒にどのような指導が必要なのかを考えながら授業を行うことができた。また、授業後の研究協議でも、生徒の記述から評価を考える際の基準が明確になった。

このように、適切な評価基準を設定することで、単元の終末に向けて適切な授業構成を考えることができ、教師の評価力の向上を図ることができた。

(4) アンケートの結果について

表1は全生徒へのアンケートの結果である。「授業に主体的に取り組んでいる。」「授業がわかる。」という質問項目に対し、肯定的に回答した生徒は7月よりも2月の方が減少している。これは、オンライン授業が続いたことや、学習内容がより難しくなっていることが影響していると考えられる。一方で、学校の授業時間以外で90分以上学習している生徒の割合は向上しており、学習意欲は高まっている様子がうかがえる。

表1 全生徒へのアンケート

調査項目	7月	12月	2月
授業に主体的に取り組んでいる。	92%	91%	86%
授業がわかる。	88%	86%	84%
学校の授業時間以外で学習する時間が90分以上	67%	68%	69%
※ いずれも、肯定的に回答した生徒の割合			

表2 教職員へのアンケート

調査項目	7月	12月
生徒が授業で主体的に取り組むことができるようにした。	50%	66%
生徒がわかる授業をした。	79%	87%
授業スタイルの実践を通して、生徒が考えを書いたり、発表したり進んで学習できるようにした。	54%	75%
※ いずれも、「最もよく当てはまる」に準じた回答		

表2は全教職員対象のアンケートの結果である。いずれの項目も、7月より12月にかけて「最もよく当てはまる」と回答した教職員が多くなっていることがわかる。特に、「授業スタイルの実践を通して、生徒が考えを書いたり、発表したり進んで学習できるようにした。」との項目については21%の向上が見られた。

これらのことから、教職員は研修について肯定的に捉え、実践を重ねているが、個別の支援が必要な生徒については生徒が主体的に授業に取り組み、授業内容を理解するところまでは十分に研修が進んでいないことがわかる。

(5) 今後の課題

9月にオンライン授業が行われ、それ以降本校でもICTを授業にどのように組み込んでいくかが課題となっている。文部科学省が令和3年3月に発表した、『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』の資料では、ICTの学習履歴を活用することにより、個別最適な学びを実現することができるとしている。今後本校でも学習履歴を基に、個別最適な学びを実現することで、生徒が主体的に学習に取り組んだり、授業の理解を深めたりするような学習方法の検討が求められる。特に、約1割程度の「授業に主体的に取り組めず、授業もわからない。」と回答している生徒に対し、どのような個別の支援の手立てを考えていくかが課題だといえる。

また、本校の多くの教員から、授業の評価方法についての研究がさらに求められるという反省が多く挙げられた。特に、「主体的に学習に取り組む態度」の評価をどのように行うべきなのかについては、さらに研究を進める必要があると考えられる。